

訪問看護実習における学びの分析

野中弘美¹⁾, 金子美千代²⁾, 米増直美¹⁾, 久松美佐子¹⁾, 益満智美¹⁾, 丹羽さよ子¹⁾

要旨

本研究の目的は、訪問看護実習において学生がどのような学びを得たか具体的に明らかにすることである。成人看護学実習を終え、訪問看護ステーションでの実習を履修した学生38名のレポートを対象に、実習の履修順序により2つの群に分け(Ⅱ→Ⅰ群, Ⅰ→Ⅱ群)、学びに関する記述を抽出し、意味の類似性を基に分類しカテゴリを抽出した。その結果、両群で【対象の生活を支える視点】、【家族ケアの重要性】、【意思決定支援の大切さ】、【在宅看護における基本的な視点】の共通するカテゴリが抽出された。【地域包括ケアの視点をもつ重要性】はⅡ→Ⅰ群のみ、【多職種連携することの重要性】はⅠ→Ⅱ群でのみ抽出された。また、両群ともに【対象の生活を支える視点】のラベル数が最も多かった。以上より、学生は在宅看護過程において必要な視点を獲得しているといえる。しかし、対象の特性に合わせた具体的な視点的獲得については今後検討していく必要がある。

キーワード：訪問看護ステーション, 実習, 学び, 在宅看護過程

はじめに

看護基礎教育において、2009年のカリキュラム改正により在宅看護論は「専門分野」から「統合分野」へと位置付けられた。中でも、在宅看護論における臨地実習においては「訪問看護に加え、多様な場で実習を行うことが望ましい¹⁾」とされている。また、社会背景として、団塊の世代が後期高齢者となり高齢化率が30%を超える2025年問題を目前に控え、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で自分らしい暮らしを最後まで続けることができるよう、地域包括ケアシステムが構築・推進されていることや、在宅ケアの対象が急増・多様化してきており²⁾、在宅看護の基礎教育の重要性は増していると言える。

しかし、在宅看護学実習における課題として、清水は①1施設2名ずつ実習を行うことで学生が分散し、移動や指導時間を割かれることから、質の高い指導が行える人材の確保や、実習に理解を示してくれる実習施設を維持していくこと、②教員の目が届きにくい実習であるた

め、学生自身の主体性や計画性、準備状況により同じような機会が与えられていても実習成果に差が生じる面があること、③訪問のための移動に関する安全面の配慮等を挙げている³⁾。本学医学部保健学科看護学専攻では、訪問看護ステーションを含む4施設で在宅看護学実習を行っているが、特に訪問看護ステーションでの実習(以下訪問看護実習)では、例年約15か所の訪問看護ステーションに1~2名の学生を受け入れていただいており、同様の課題がある。加えて、実習期間は1週間と他の臨地実習と比較して短いため、実習の指導方法や実習の在り方について検討していく必要がある。本学では2015年より訪問看護実習を開始し、約5年が経過した。そこで、まずは訪問看護実習において学生がどのような学びが得られているか具体的に明らかにすることを目的とした。

研究目的

訪問看護実習における学生の学びを明らかにすること、今後の実習の在り方、講義について検討する資料と

¹⁾ 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻

²⁾ 鹿児島大学医学部島嶼・地域ナース育成センター

連絡先：野中 弘美

鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/Fax: 099275679

E-mail: nonaka@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

表1. 実習日程

	月	火	水	木	金
地域・在宅 看護学実習Ⅰ	保健センター（2日）				学内日
			地域包括支援センター （1日）		
			地域医療連携センター （1日）		
地域・在宅 看護学実習Ⅱ	訪問看護ステーション（5日） ※金曜日は午後から学内				

すること。

研究方法

1. 対象

- 1) 対象は、看護学専攻3年次学生77名のうち、成人看護学実習のみが終了し、平成30年10月15日～26日の期間で地域・在宅看護学実習Ⅱを履修した学生38名。
- 2) 学習背景：看護教育学、看護管理学、家族看護論及び卒業研究以外の看護専門教育科目は修了している。地域・在宅看護学では、講義の他に訪問演習や、福祉用具を取り扱う会社の協力の元、福祉用具について学び体験する演習を行っている。また、3年次の後期に領域別実習（地域・在宅看護学、成人看護学、老年看護学Ⅰ、精神看護学、小児看護学、母性看護学）を行うが、今回は訪問看護実習での学びを明らかにすることが目的であるため、他の領域別実習をほぼ履修していない学生を対象とした。

2. 「地域・在宅看護学実習」の概要

本学では、地域・在宅看護学実習として3年次の10月～2月までの期間に2週間実習を行っている。地域・在宅看護学実習の目的を、「対象の生活のありようを理解し、対象が住み慣れた地域で安心して自分らしく暮らし続けるために必要なケアシステムとその課題を理解する」としており、地域・在宅看護学実習Ⅰ・Ⅱに分類されている。地域・在宅看護学実習Ⅰ（以下実習Ⅰ）では保健センター、地域包括支援センター、特定機能病院の地域医療連携センターの3施設で、地域・在宅看護学実習Ⅱ（以下実習Ⅱ）では訪問看護実習を行っており、実習日程は表1に示す通りである。

1) 訪問看護実習の展開方法

実習目標として、①地域包括ケアシステムにおける訪問看護ステーションの機能と訪問看護師の役割について理解する、②「支える」という看護の本質を再考し、その人らしい生活の実現に向けての看護の実際を学ぶ、としている。実習目的を達成するための行動目標として以下の7点を示している。

- ①訪問看護ステーションの機能と役割を具体的に述べることができる。
- ②在宅療養者について多角的に情報を整理し、在宅療養者・家族の抱える健康問題・生活問題をアセスメントすることができる。
- ③在宅療養者・家族が生活や人生で何を重視しているのか（価値観）について述べるができる。
- ④在宅療養者・家族が現在の生活とあるべき理想の生活ギャップについて、どのように考えているのか述べるができる。
- ⑤在宅療養者・家族の持つ力（強み）を引き出し、生活の質が高められるための支援について述べるができる。
- ⑥多職種との連携・協働のなかで訪問看護師の果たすべき役割を述べるができる。
- ⑦在宅療養者・家族の生活の場に第三者が介入することの意味を考え、在宅療養者・家族に配慮した行動がとれる。

「その人らしさ」という対象の全体像を理解するために、複数回訪問できる対象を受け持ちとし、事例展開を行っている。また、受け持ち以外の訪問にも可能な限り同行させてもらい（1日約2～4件の訪問）、機会があればサービス担当者会議等にも参加させていただいている。実習最終日には、学内でカンファレンスを行い体験を学生同士で共有し、体験の意味づけを行うことで学びを深めている。

3. 調査内容

調査内容は、地域・在宅看護学実習終了後に提出された最終レポートの記述内容とした。最終レポートの課題は、①実習を通しての「学び」と「その学びを得た具体的な実習体験について」、②地域包括ケアシステムにおける訪問看護師の役割と課題について、の2点である。

4. 分析方法

実習の履修順序により、得られる学びに違いが出るのが予想されるため、対象を、実習Ⅱを行った後に実習Ⅰを行った群（以下Ⅱ→Ⅰ群）20名と、実習Ⅰの後に実

習Ⅱを行った群（以下Ⅰ→Ⅱ群）18名に分けて分析した。最終レポートの記述内容より、学生が得た「学び」に関する記述を抽出しラベルとした。さらにラベルを比較検討し、上位の概念を抽出するために意味の類似性を基に分類し、サブカテゴリ、さらに上位の概念であるカテゴリを抽出した。

5. 倫理的配慮

本研究に使用したデータは個人が特定されないよう匿名化した。なお、本研究は教育評価を目的としているため、倫理審査の必要がない旨の回答を本学疫学研究等倫理委員会から得ている。

結果

実習終了後に提出された最終レポートより、学生が得た「学び」に関する記述を抽出し、それぞれの群で分類を行った。その結果、全体で141のラベルが抽出され、その内訳はⅡ→Ⅰ群74、Ⅰ→Ⅱ群67であった。また、これらのラベルを比較検討し、意味の類似性を基に分類した結果、両群ともに5つのカテゴリに分類された。なお、カテゴリは【 】, サブカテゴリは〈 〉で表した。

1. 実習の履修順序による記述内容の違い

1) Ⅱ→Ⅰ群の記述内容（表2）

最もラベル数の多かったカテゴリは、【対象の生活を支える視点】36ラベルであった。その他のカテゴリは、【地域包括ケアの視点をもつ重要性】15ラベル、【家族ケアの重要性】11ラベル、【意思決定支援の大切さ】8ラベル、【在宅看護における基本的な視点】4ラベルであった。

2) Ⅰ→Ⅱ群の記述内容（表3）

最もラベル数の多かったカテゴリは、【対象の生活を支える視点】44ラベルであった。その他のカテゴリは、【家族ケアの重要性】8ラベル、【多職種連携することの重要性】と【意思決定支援の大切さ】がそれぞれ6ラベル、【在宅看護における基本的な視点】3ラベルであった。

3) 全体分析結果

【対象の生活を支える視点】、【家族ケアの重要性】、【意思決定支援の大切さ】、【在宅看護における基本的な視点】の4つは両群に共通していたが、Ⅱ→Ⅰ群では【地域包括ケアの視点をもつ重要性】のカテゴリが、Ⅰ→Ⅱ群では【多職種連携することの重要性】のカテゴリがそれぞれ抽出された。

両群で共通していた【対象の生活を支える視点】のラ

ベル数の割合は、Ⅱ→Ⅰ群では全体の48.6%、Ⅰ→Ⅱ群では全体の65.7%を占めており最も多かった。【家族ケアの重要性】については、Ⅱ→Ⅰ群14.9%、Ⅰ→Ⅱ群11.9%、【意思決定支援の大切さ】は、Ⅱ→Ⅰ群10.8%、Ⅰ→Ⅱ群9.0%を占めていた。【在宅看護における基本的な視点】では、Ⅱ→Ⅰ群5.4%、Ⅰ→Ⅱ群4.5%であった。

2. 各カテゴリにおける学生の学び

1) 【対象の生活を支える視点】

このカテゴリは両群から抽出され、他のカテゴリと比べて最もラベル数が多かった。

学生は、〈対象の価値観を理解する視点〉〈対象者の目線で考える生活を支えるという視点〉〈介護力を見極め環境を整えるという視点〉など、疾患中心や身体的ケアで対象を捉えるのではなく、対象は「生活者」であり、対象の「生活を支える」ことが在宅看護では重要であるということを学んでいた。また、〈求められる看護実践能力〉として、対象を的確にアセスメントし、優先順位を考えてケアを行うことや、〈在宅にある物品を工夫しながら活用するという視点〉という在宅ならではの工夫についても学ぶことができていた。そして、在宅での療養期間は長期となることから、予防的視点を持って関わることや、先を見越した関わりをする〈対象に合わせた継続的な支援を行うという視点〉も獲得していた。

2) 【地域包括ケアの視点をもつ重要性】と【多職種連携することの重要性】

これらのカテゴリは、それぞれの群でしか認められなかったが、学生は対象の生活を支えるために〈多職種と連携・協働することの大切さ〉や、職種間で連絡ノート等を使い情報共有すること、役割調整を行うなど〈多職種の中で看護師がつなぐ役割〉があると学んでいた。

3) 【家族ケアの重要性】

学生は、〈家族もケアの対象であるという気付き〉から、介護者の負担を考慮しレスパイトを検討することや、緊急時やターミナル期において家族が対応できるよう指導するといった〈家族の気持ちに寄り添い必要なケアを行う〉ことが重要であると学んでいた。

4) 【意思決定支援の大切さ】

学生は、〈対象・家族の意向を尊重し信頼関係を築くということ〉といった対象の思いやこだわりを理解し、関わっていくことの大切さを学んでいた。また、対象とその家族が抱える思いが違う場合に、看護師がどのように双方の妥協点をみつけ調整するかという〈対象とその家族の思いを大切にす視点〉も獲得していた。さらに、

表2. 訪問看護実習における学生の学び（Ⅱ→Ⅰ群）

カテゴリ	サブカテゴリ	ラベル	データ例	
対象の生活を 支える視点	対象の価値観を理解する視点	対象の生活や価値観など個性を大切に ケアの方向性 (8)	単に(ケアが)必要だから行うではなく、 療養者の性格や考え方に沿ってケアの 方向性を考えなければいけないと 学んだ	
		自己の価値観ではなく対象を主体とした ケアを検討すること (1)	今後は、こうした方がいいという偏見は 捨てて、対象者・ご家族にとってどう いう支援がよいのか、どのようなこと を望まれているのか、しっかり考えて いきたい	
	求められる看護実践能力	的確なアセスメントの必要性 (3)	急変や異常を判断する技術と知識を身 に着けることが求められると思った	
		優先順位を考えてケアをすることの 大切さ (2)	在宅での生活をスムーズにその人が 安心して楽しく暮らせるものにする ためには、対象とコミュニケーション をとり、タイミングをみて優先順位 を決めることも大切なことだと学んだ	
		訪問時以外の状況を知ることの大切 さ (1)	訪問時の利用者の健康状態だけで 判断するのではなく、住居の状態や 毎日の記録を見ることによって訪問 時以外の利用者の生活を予測しア セスメントしていくことが大切 である	
	対象に合わせた継続的な支援を行う という視点	先を見越した継続的に支援すること の大切さ (4)	大切なことはその人がその人らしく、 希望に沿った生活を送るためには、 どのような支援が必要なのかを考え、 先を見越した関わりを行っていく ことだと思った	
		予防的視点をもつこと大切 (1)	在宅での療養は、病棟とは異なり、 療養期間がとても長いことも特徴 の一つである。そのため、その人 らしい生活をずっと続けていくため には、できる限り今の状態を悪化 させないようにし、家庭の中で自 立できるようにこれからの生活も 含めた長い目で考えることも大切 だと思った	
		対象に合わせた効果的なケアを 検討すること (1)	療養者の日常生活の様子を観察し、 どの部分を少し調整することで 問題を解決することができるかを 考えることで効果的に生活の援助 ができることを学んだ	
	在宅にある物品を工夫しながら活用 するという視点	限りある資源を工夫しながら使う ということ (3)	「器具の工夫」(ペットボトルを洗 浄用として用いたり、防水シートの 代わりにビニールシートを用いる 等)について学んだ	
		訪問時に物品を確認すること (2)	在宅の場合、行きたいときにいつ も訪問というわけにもいかない ため、残りの物品の数を記録してお いたり、家族に購入してもらえ るよう頼んでおくことも大切 なことであると学んだ	
	対象者の目線で考える生活を支える という視点	生活を支えるという視点 (2)	「命をみるのではなく、生活を みる」ということを学んだ	
		療養者の目線に立つということ (2)	療養者の言葉や行動の中に隠され た本当の意味を感じとれるよう、 もっと療養者の目線で考える 必要があることを学んだ	
退院後の生活・環境をイメージする 視点	退院後の生活を見据えた支援 (2)	退院していきなり自宅ケアをする ことは、療養者にもその家族にも 負担がかかってしまうため、入院 中からあらかじめ退院後の生活 を見据えた援助や指導が必要 であると感じた		
	退院後の療養場所・環境を 考える (1)	病棟の看護師は患者の自宅に 訪問することはできないが、帰 る場所・退院後の環境の変化 を考えながら支援を行うことが 大切であると感じた		
介護力を見極め環境を整えるという 視点	生活環境や介護力を知ることの 重要性 (2)	訪問看護師は、療養者の家庭 環境や介護力を見極めた上で 療養者や家族が望む生活に向 けての計画作成や援助を行っ ていく必要があると学んだ		
	ケアは介護者の生活の一部だ という捉え方 (1)	療養者を障害のある子ども として接するのではなく、障 害もその子の一つの特徴とし て受け入れ、ケアも生活の一 部となっているような印象 を受けた		
地域包括ケア の視点をもつ 重要性	多職種と連携・協働すること の大切さ (7)	多職種と連携・協働すること の大切さ (7)	訪問看護師の役割は、多 職種と連携・協働して情報共有 を行い、療養者・家族の意向 に沿って、個々に合わせた ケアを行うことであると 感じた	
		情報を共有し話し合うこと で信頼関係を築くこと (2)	情報を共有することでその 人にとって今重要なことは 何か、どのようなことに注 意して利用者と関わってい けばよいかということ把握 することができ、そのこと は互いの信頼関係の構築 や効率的なケアにつなが っていくというインフォ ーマルサポートは医療者 が提供できるものではない ため、その方の生き方、 人の関わり方がつくり だした強み・力であると 感じた	
	自助・互助の視点を持ち 対象を支える視点	インフォーマルサポートは 強みであるという気付き (2)	家族もチームの一員である という考え (1)	(小児の場合)介護者が 主に両親であり、若い世 代であるため一組のチ ームとしてケアを行う ことができる(老老介護 となるとケアの部分で 限界がまってしまう こともあるため)
家族ケアの 重要性	家族もケアの対象である という気付き	多職種の中で看護師が つなぐ役割	多職種の中で看護師が つなぐ役割 (3)	主介護者に負担が集中 しないように、主介護者 や他の家族、ヘルパー の間に入り、役割調整 を行うというも訪問 看護師の役割の一つ であると知ることが できた
		家族もケアの対象である という気付き (6)	療養者本人だけでなく、 それを支える家族を ケアすることも訪問 看護師の大切な 役割なのだと 思った	
		レスパイトケアを 考慮した家族支援 の必要性 (3)	主介護者となる人に 限界がくるまで 頑張りせないよう 定期的にレスパ イトケアを入 れるなどして 身体的にも精 神的にも休 まる時を 与えられる よう調整 することが 必要である ことを 学んだ	
意思決定 支援の大切 さ	対象・家族の意向を尊重し 信頼関係を築くこと (1)	介護者の不安を傾聴する こと大切 (1)	主な介護者が日頃抱 えている不安を傾 聴し、また対象 の成長と共に喜 ぶことで母 親が自分の 育児に自信 を持ち、より 積極的な 育児・介 護につな がると 感じた	
		緊急時の対応を 家族に伝える ことの必要 性 (1)	緊急の場合、病 院のように 素早く対応 することが できない ため、自 宅で生活 が送れる ための 身の回 りの ケア だけ でなく、 医療者 が駆け 付ける までの 間、介 護者 がそれ に 対 応 で き る よ う に 指 導 し て い か な け ら ば な い	
		対象・家族の意向を尊重し 信頼関係を築くこと (1)	訪問する中で コミュニケーション や利用者 のこだわり に合わせた バイタル サインの 測り方や ケアを していく ことで 信頼 関係 を 築 い て い く こ と が で き る の だ と 学 ん だ	
対象とその家族の揺らぎに 寄り添う重要性	揺れ動く気持ちに寄り添 うこと (2)	療養者の思いを尊重し つつ、必要に 応じて 意思決定 支援を行 うことも 訪問 看護師 の役割 なのだと 思った	状態が急変した 場合の選 択など、 一度こう 決めて も療 養者 の状 態を 実 際 に 目 に し て 生 活 を 送 る 中 で、 家 族 の 気 持 ち は 常 に 揺 れ 動 い て い く。家 族 や 療 養 者 の 状 況 に 応 じ た 意 思 決 定 支 援 を 行 う こ と が 大 切 で あ る と 分 か つ た	
		対象と家族が抱える 思いの違い を知り妥 協点を みつけ る必要 性 (2)	家族にも今までの 生活や生 き方 がある ことを 忘れ ず、本 人と 家 族 双 方 の 希 望 の 妥 協 点 を 見 つ け 出 し て い く こ と も 必 要 で あ る と 学 ん だ	
在宅看護に おける基本 的な視点	生活の場に入ることで 生じた主体は療養者 であるという気付き	生活の場に入る際の 姿勢の大切 さ (2)	「自宅に入 らせて頂 く」とい う謙 虚な 姿 勢 で 臨 み、 生 活 中 の 困 り ご と を 把 握 し、 そ の 方 が よ り 自 分 ら し く 生 活 で き る た め に は ど う し たら 良 い か と い う 視 点 を 持 ち な が ら 援 助 し て い く こ と が 大 切	
		主体は療養者である という気付き (2)	病棟では「医療を 提供する者 と医療を受 けにきて いる者」と いう関係 性が強 かった の に 対 し、 「家 に 住 ん で い る 方 と そ こ に お 那 魔 さ せ て い た だ い て い る 者」と い う 関 係 に な っ て い る と 感 じ た	

〈対象とその家族の揺らぎに寄り添う重要性〉という、病状の変化等に伴い生じる気持ちの揺らぎを支えることについても学んでいた。

5) 【在宅看護における基本的な視点】

学生は、訪問に同行することで〈生活の場に入ること
で生じた主体は療養者であるという気付き〉が生じていた。同時に「場」を意識することで、自己の立ち位置についても考え、謙虚な姿勢で臨むことや礼儀を大切にするといった接遇面についても振り返っていた。

考察

1. 訪問看護実習における学びについて

実習を通して、学生は【在宅看護に基本的な視点】【対象の生活を支える視点】により、主体は療養者であることに気付き、対象を「生活者」として捉えることができていた。これは、疾病の治療・救命を目的とする「治療モデル」から、対象の生活の質の向上を目的とする「生活モデル」⁴⁾へと思考の転換を行っていたからであると考える。そして、対象を取り巻く環境や家族について視点を広げる【家族ケアの重要性】【意思決定支援の大切

表3. 訪問看護実習における学生の学び（Ⅰ→Ⅱ群）

カテゴリ	サブカテゴリ	ラベル	データ例
対象の生活を支える視点	対象の価値観を理解する視点	対象の生活や価値観など個性を大切にしたケアの方向性 (9)	強みやそのらしさを捉えるといった面では、身体機能だけではなく、対象がこれまでの人生をどのように歩んできたのか、家庭環境や家族関係、幅広い視点から発見することができるようになった。また、目に見えない部分（本人の歩んできた人生や性格から）からも捉えることの大切さにも気づくことができた
	求められる看護実践能力	的確なアセスメントの必要性 (4) 優先順位を考えてケアをすることの大切さ (3)	訪問看護師は決められた時間の中で、必要な処置をすべて終わらせる能力、全身状態を観察して瞬時にアセスメントする能力が求められるのだということも学んだ 優先順位の高いものを選んでケアをしていくという視点が訪問看護において必要となってくると学んだ
	地域で生活をするという視点	生活の中に入りこみ支援するという視点 (4) 住み慣れた地域で暮らすことの意味を考える (3)	暮らしの中に介入していることを忘れずに「そのらしさ」を活かしながら看護をすることが重要だと改めて感じる事ができた 対象者が病気を抱えながらも住み慣れた地域で、居心地のいい家で安心して暮らしていけるようにサポートすることが訪問看護師の役割だと学んだ
	対象とその家族の強みに気付く視点	対象とその家族の強みを知ることの大切さ (6)	看護について考えるとき、「何をすれば良いのだろうか」と自分がすることを考え、その人の問題やリスクばかりを探していた。しかし、実習を通して、生活をしている人々の強みを見つけ、その点を活かして支援していくことが大切だと学んだ
	介護力を見極め環境を整えるという視点	生活環境や介護力を知ることの重要性 (6)	介護者や家族に体調の変化はないか、ストレスや疲れはないか、コミュニケーションをとってアセスメントし、傾聴することによって対象者とその家族がよりよい生活を維持できるように環境を整え支えていくという役割があることも学んだ (15-4)
	在宅にある物品を工夫しながら活用するという視点	限りある資源を工夫しながら使うということ (5)	限られた資源の中で、生活の中にある物を効率よく利用することが大切だということが分かった
	自立性を尊重しケアを検討するという視点	自立性を損なわない支援を考えるということ (3)	(内服薬の飲み忘れ、飲みすぎに対し) お薬カレンダーを設置するなどして自然と療養者が管理しやすいように導入方法を変えることで、自尊心を傷つせずに援助することができると学んだ
	退院後の生活をイメージする視点	退院後の生活を見据えた支援 (1)	家族のアセスメントを行い、病院で退院前には必ず主なケアを行う家族とその協力者までケアが行えるよう教えたり、ほほ技術を取録した状態で在宅に戻れるよう病棟看護師が支援する必要性を学んだ
	家族ケアの重要性	家族の気持ちに寄り添い必要なケアを行うということ	家族に気づきを促すケアの大切さ (2) ターミナル期に家族の対応方法を具体的に伝えるということ (3)
家族もケアの対象であるという気付き		家族もケアの対象であるという気付き (3)	在宅での主介護者やそれを支える人がケアに必要な知識・技術を獲得できているのか、何が不足しているのかを把握し、在宅で看護師がいなくても自分でできると思えるまで支えたり、家族が意思決定に悩んでいる時にメリット・デメリット等を伝え、支えるなど家族を含む対象者を支えることが訪問看護師の役割
多職種連携することの重要性	多職種と連携・協働することの大切さ	多職種と連携・協働することの大切さ (5)	住み慣れた場所である人らしく暮らすためには、療養者やその家族の思いを聞いて、他の職種と連携・協働していくことが必要だと学んだ
	多職種の中で看護師が持つ役割	多職種の中で看護師が持つ役割 (1)	他訪問看護ステーションと連絡ノートを用いた情報共有、往診医との家族を仲介した連携、ヘルパーとのケア協働など多くの職種と協力して、療養者の地域での生活を守ることも訪問看護師の役割
意思決定支援の大切さ	対象・家族と良好な関係を築くことの大切さ	対象・その家族と良好な関係を築くことの大切さ (3)	療養者住み慣れた環境での療養生活を支えるということは、対象の生活のスタイル、パターンを守ることであり、同時に療養者と家族の関係を守るために、自分たちも療養者及びその家族とも良好な関係を築いていくことが重要であると学んだ
	対象とその家族の揺らぎに寄り添う重要性	揺れ動く気持ちに寄り添うこと (3)	本人・ご家族はその時その時に何が最も良いのか迷い悩んでようやく判断をしている。その決断に寄り添い支えることが在宅で看取るということだと感じた
在宅看護における基本的な視点	生活の場に入ることで生じた主体は療養者であるという気付き	生活の場に入る際の姿勢の大切さ (2)	生活の場に入る際の対象者の生活の場に踏み込ませてもらうという立場としての礼儀や、対象者の経済的負担の軽減に努めることは、訪問看護師としての基本として大切にしていかなければならないと改めて感じた
		主体は療養者であるという気付き (1)	病院とは違い、医療職は生活にお邪魔させてもらっているものであり、主体は利用者や家族であることを強く実感した

さ)について学んでいた。在宅看護過程は、疾患を治す、症状を緩和するだけではなく、対象者の望む生き方、暮らしを支えるための多様な看護の形があることをまず理解することが大切であることから⁴⁾、本実習を通して、在宅看護過程を展開するために核となる視点を獲得できていると考える。

さらに、在宅看護現場において求められる訪問看護師の能力として、「利用者の生活場面で看護過程を展開する能力」、「利用者の家族との関係を構築する能力」、「家族のケア能力を向上させる能力」、「多職種との連携による問題解決能力」が挙げられており⁵⁾、これらは本実習で学生が得た学びに共通している。このことから、学生は在宅看護において必要とされる視点や思考過程を獲得できたと考える。

2. 履修順序による学びの違い

履修順序により2つの群に分け分析を行った結果、【地域包括ケアの視点をもつ重要性】と【多職種連携することの重要性】のカテゴリはそれぞれの群から抽出されたが、いずれも多職種連携・協働の重要性についての

学びであった。しかし、その中で、「訪問看護実習」後に「保健センター、地域包括支援センター、地域医療連携センター」で実習を行った群のみに〈自助・互助の視点を持ち対象を支える視点〉というサブカテゴリが抽出された。このサブカテゴリは『インフォーマルサポートは強みであるという気づき』『家族もチームの一員であるという考え』というラベルから構成された。これは、訪問看護に同行する中で、家族のみならず家族以外の支えてくれる存在があるという事例に出会ったことで生じた学びであり、必ずしも実習の履修順序による学びの違いであるとは言い難い。一方、【対象の生活を支える視点】では、「保健センター、地域包括支援センター、地域医療連携センター」での実習後に「訪問看護実習」を行った群のみに『生活の中に入りこみ支援するという視点』『住み慣れた地域で暮らすことの意味を考える』の〈地域で生活をするという視点〉という学びが得られていた。このような学びが得られたのは、保健センター・地域包括支援センター実習を先に行ったことで、地域の特性について知り、地域で療養する人々だけでなく健康な人々と関わることで「生活モデル」への思考の転換が

より図りやすくなったからではないかと考える。

実習の履修順序による学びの違いについては、同じ体験をしてもその体験をどう意味づけするかは個人によるので、履修の順序に重きを置くのではなく、「生活モデル」への思考の転換を早期に図り、個々の体験の学びを深められるよう保健センター・地域包括支援センター、地域医療連携センター、訪問看護ステーション実習での体験をどうリフレクションし統合させていくかが重要であると考えます。

3. 地域・在宅看護学実習における今後の課題

分析の結果、実習目標は概ね達成できたと考える。しかし、在宅看護の対象は乳児から高齢者まで様々な年齢の方、そして慢性的な病状や障害をもつ人、医療依存度の高い人、終末期にある人と、対象が有する状況は多様化していることから⁴⁾、求められるニーズを把握し、対象の特性に応じたアセスメントや支援方法について実習を通して具体的な学びとしていくことが重要である。これらに関しては、対象の特性を考えた看護展開の演習を検討する等実習前の準備を十分に行っていく必要がある。また、対象が住み慣れた地域で安心して自分らしく暮らし続けることを支えるためには、対象や対象を取り巻く家族や環境だけでなく、より広い視点で捉える必要がある。今回は、訪問看護実習における最終レポートのみ調査対象としたが、地域・在宅看護学実習における4施設（訪問看護ステーション、保健センター、地域包括支援センター、地域医療連携センター）での学びが統合できているか、学生の達成度についても検証していく必要があると考えます。

また、本実習の学びは他の看護学領域の実習（成人看護学、老年看護学Ⅰ、精神看護学、小児看護学、母性看護学）での学びとの関連があるので、その関連性も勘案したうえで地域・在宅看護学実習の学習目標・方法を検討していく必要があると考えます。

文献

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書（平成19年）、
<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>
（閲覧日：2018年12月21日）
- 2) 全国訪問看護事業協会：訪問看護アクションプラン2025—2025年を目指した訪問看護—。
<http://www.jvnf.or.jp/2017/actionplan2025.pdf>（閲覧日：2018年12月21日）
- 3) 清水準一：首都大学東京における在宅看護学実習の目標と進め方—現状と今後の課題—。日本在宅看護学会誌，2015；3（2）：25-29（会）

- 4) 木下由美子：新版 在宅看護論。第1版，医歯薬出版株式会社，東京，2016，14-72
- 5) 王麗華，木内妙子，小林亜由美，他：在宅看護現場において求められる訪問看護師の能力。群馬パース大学紀要，2008；6：91-99

Analysis on What Is Learned through Home-care Nursing Training

Hiromi Nonaka¹⁾, Michiyo Kaneko²⁾, Naomi Yonemasu Acdan¹⁾, Misako Hisamatsu¹⁾, Tomomi Masumitsu¹⁾,
Sayoko Niwa¹⁾

1) School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University,
Sakuragaoka 8-35-1, Kagoshima, 890-8544, Japan

2) Education Center for Nurses in Remote Island and Rural Areas, Faculty of Medicine,
Kagoshima University

Address correspondence to Hiromi Nonaka
E-mail: nonaka@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

abstract

The current study is to clarify what specifically nursing students learn through home-care nursing training. Based on the reports submitted by 38 students who completed an adult nursing training course and subsequently a training course at a home-care nursing station, they were divided into two groups (II→I Group and I→II Group) depending on the areas they received training in. Then, learning-related descriptions were extracted from their reports, and categorized based on similarity in meaning. As a result, four common categories were identified in both Groups, including <perspective of supporting the patient's living>, <importance of care-taking by the patient's family>, <importance of supporting decision-making>, and <basic perspectives in home-care nursing>, while <importance of having a perspective of community-based integrated care> was identified only in II→I Group, and <importance of inter-professional work (IPW)> was identified only in I→II Group. In both Groups, the number of labels are the largest for <perspective of supporting the patient's living>. From these facts, the students are considered to have successfully acquired the perspectives that they were expected to acquire through the home-care nursing training course. It is necessary, however, to examine in the future a course content that allows them to acquire specific perspectives in response to the characteristics of each patient.

Keywords: Home-care nursing station, practice, learning, home-care nursing training